

基礎から読み解く DPC 第3版 実践的に活用するために

松田晋哉 著

2003年にDPCが特定機能病院に先行導入されてから8年が過ぎ、大きな変革の時期を迎えている。DPCの変遷に合わせて刊行されてきた本書も第3版となり、その存在意義は版を重ねるごとに大きくなっている。今後の大きな変革を予期させる2010年度改定後に刊行された本書は、サブタイトルもこれまでの『正しい理解と実践のために』から『実践的に活用するために』に変わり、著者の意気込みが感じられる。

病院の運営でいちばん大切なのは診療の質と経営の質であり、2つが相まって初めて健全な医療を提供することが可能である。公的病院が次々と独立法人化し、民間病院も社会医療法人化されるなかでこのような考えはますます重要になってきている。著者はまえがきで「……したがって、それをを用いることで臨床面・経営面で各施設を共通の視点から評価することが可能……」と述べているが、まさにDPCが良質な医療を担保するうえでのツールであることを示しているものといえる。

第1章では診断群分類を理解するために必要な事項が述べられており、今回および今後の改定の方向性について説明されている。

第2章ではDPCの本来の目的である医療の質の評価について述べられており、ベンチマークによる活用、今後どの病院にも望まれる臨床研究での活用が述べられている。

第3章では医療のもう一つの指標である経営の質について述べられている。診療・経営の“見える化”にはDPCが有用であり、またクリニカルパスによる診療の標準化は必須の課題である。さらにこの章では地理情報システム、Value chain分析、BSCなどとDPC

についての説明もあり、医療マネジメントの先端を目指すという読者には必読である。

第4章ではDPCと各医療職のかかわりが述べられているが、専門分化が進んできている現状でチーム医療の重要性がいわれており、DPCは共通の言語・ツールとして活用できるものと考えられる。

医療は地域産業といわれるが、医療再生がいわれるなかで地域医療提供体制整備は喫緊の課題である。その意味でも第7章は大変示唆に富むものとなっている。また診療報酬と介護報酬ダブル改定を前にして、医療提供体制整備は診療報酬改定と連動して行われるのが望ましく、ここでもDPCの果たす役割は大きいものとなってくる。

第8章では著者の考えである医療の質と経営の質の重要性が繰り返し述べられている。DPCの導入以来8年が過ぎ、今までは制度を理解し適用することに一生懸命だったのが、ようやくこれを実際に活用して医療の質の担保に資する時期に来ているものと思われる。DPC自体はあくまでもツールであって目的ではないので、われわれ医療者に何が求められているのかを理解してDPCを使いこなす時期に来ている。

このように見てくると、DPCの理論・研究・実践の第一人者である著者による今回の第3版は必読の書であり、実践の場で活用してほしいものである。

聖隷浜松病院病院長 堺 常雄

B5 頁240 2011年

定価 3,570 円 (本体 3,400 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-260-01205-8] 医学書院刊